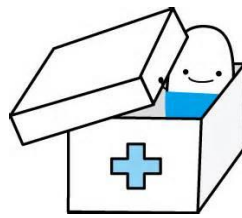


もうひとつのおきぐすり



「今採ってきたんだ。食べてみな。」

手渡されたきゅうりはグニッと曲り不格好だった。しかもトゲトゲしていて

「食べれるもんなら、食べてみな」と言っているかのようだった。

少し土をはらいトゲトゲを手で潰して、先端を口へと運ぶ。

「ポキッ」心地よい音をたて適量を口に残し、きゅうりは折れる。

口の中から鼻へと駆け抜ける香り、一瞬にして小学生の夏休みにタイムスリップした。入道雲、カブトムシ、

川の冷たい水、友達の声、舌尖から脳へと伝わるきゅうりの味で引き戻されなければ、帰ってこれなかったかもしれない程だった。

「うまいだろう。これが本物の味だ。」

「俺は、野菜を作って60年になる。いつ採れたのか、旨いか、元気か、正常か、全てこの手と目と鼻が覚えている。」

「スーパーに行って、その野菜をこの手で持てば全てが判る。」

「残念ながら、今のスーパーには本物が少ない。」

「本物とは、その土地で作られ、その土地で今採れた野菜ということだ。」

なるほど、身土不二だな。

その土地で生まれ、その土地に帰っていくのだから、その土地で採れたものを食べて生きていくのが、

一番自然(健康)という考え方だ。

しかし、この簡単なことが意外と難しい。

流通や技術が発達し、どこのいつのものでも手に入るようになってしまったからだ。

夏なのに大根、冬なのにトマト、秋田なのにゴーヤ、沖縄なのに五葉豆。

四季の移り変わりに人間が順応して生きていく手段、その土地の風土に順応して生きていく手段、が身土不二である。

異質なものを、口に多く(山ほど)入れてしまう現代の生活。

意識していかないと、どんどん体が不自然な状態になってしまうかもしれない。

怖い話だが、「癌」という当て字は、やまいだれに山ほどの口と書く。まさに今の消費食生活が当てはまる。

体に良いものとは、体に無理がないもの。

「ちなみに俺んちの家の木は、殆どが家を建てる前にそこに生えていた木で建てたんだよ。」

「だから、100年経っても無傷なんだよ。」

そう言って、深いしわをさらに深くして笑った。

家まで身土不二なんだな。

知っているのと、やっているのとは違う。

がんばろうっと!

それでは、JowBコンシェルジュ風見 浩でした。

